

平成二十六年 度

和歌山信愛高等学校

入学試験

国 語

受験上の注意

- 一 問題用紙は1～19ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を
開いたまま裏返しておきなさい。

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

受験番号

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自然の荒廃が問題になりはじめたとき、最初、人々の意識は、^aダイキボな開発とそれに伴って生じた自然の現象にあった。いわばそれは、自然の大切さを^b顧みない企業と行政に対する批判であった。

ある意味では、ここでは市民は気楽な批判者でいることができた。なぜなら自己の加害者性をあまり意識することなく、自然を守れと人々は主張することができたのだから。ところが、次第にそれではすまなくなる。というのは自然の問題に深入りしていくと、たちまち私たちは自然と人間の間にある微妙な関係に気づくからである。

I カタクリの花は、以前は春先になると、いろいろなところで咲いていた花である。ところがいまでは、関東地方などでは天然記念物にしてもよいほどに少なくなっている。その理由は、開発にあったというよりも、暮らしの中で薪^{まき}や炭が使われなくなつて、里山の^cパツサイや利用がおこなわれなくなったことにある。

人家近くの里山は、かつては村人が日常的に利用する森として位置づけられていた。村人はここから薪を切り出し、草を刈つて牛馬の餌^{えさ}や肥料にし、落ち葉も集めて畑に入れた。こうした^dコウイは、一面では元からある自然をこわしていくものであるが、そのことよつて明るい里山がつくられ、草花や小動物が数多く暮らす場所になつていったのである。村人の里山利用が、生物種の多様性をつくりだしていたといつてもよい。

II 自然と人間はつねに敵対的であつたわけではなく、人間による自然の利用が自然の生命力を高めてきたというケースがいくらかもあつたのである。**III** 今日おこなわれている自然の改造は、自然を^e傷めるばかりである。とすると、この違いはどこから来ているのか。

その理由は、¹その地域がつくりだしてきた伝統的な方法にしたがつて自然に働きかけているのか、それともそれを顧みることなく、近代技術によつて自然を改造しているのかという点にある。

農山村や漁村に暮らす人々は、以前からその地域の自然を利用しながら暮らしてきた。その長い歴史のなかで、人々はその地域

にもっとも適した自然の改造の仕方や、利用の方法を身につけてきたのである。ここからつくられたのが、自然を利用し、ときに改造までしながら、自然を上手に維持していく技と知恵であった。それがその地域の自然の維持にはたした役割は大きかった。

その地域に暮らす人々にとっては、自然と人間の関係は観念的なものではないのである。この関係をつかさどっているものが、その地域がつくりだしてきた人間の技と知恵であり、その技と知恵を媒介にして、自然と人間の間には、無事な関係が維持されてきた。

2 このような事実²に気がついてみると、私たちは³いくつかのことを考えなくてはならなくなる。その一つは、自然保護の主体は、基本的に地域主権的なものではないかということであった。考えてみれば、世界には共通する自然など存在しないし、日本にも日本という共通の自然は存在しない。自然はそれぞれの地域ごとにさまざまであり、そのさまざまな自然が互いに関係を結びながら、全体の自然が展開しているのである。とすれば、そのさまざまな自然に適した自然と人間の関係を創造することが自然保護の出発点であり、そうである以上、自然を守る主体は、地域主権を軸にして形成されなければならないはずなのである。

第二に考えなければならないことは、人間が自然を利用しながらも守る方法は、その地域の人々がもっている技と知恵のなかにあるということであろう。つまりそれは知識でもないし、単なるシステムでもない。人間の精神がそのまま身体の動きとなつて現れてくるような、村人にとってはどうということのない技、しかしその技をもっていない人間にとっては驚嘆すべき技、それが自然と人間の関係をつかさどる上でいかに大事かということである。

それに、もう一つ考えなければならないことがある。それは自然と人間が無事な関係を維持していくには、歴史の継承、あるいは伝統の継承という課題がある、ということであった。知恵や技は、その地域が生みだした伝統として継承されてきたものである。そして、それを継承していかないと、自然と人間の関係は無事でありつづけられない。

このようなことが分かってきたとき、4 人々は戸惑いを覚えた。なぜなら、それらは近代社会の価値観とは異なるものだったからである。近代社会では、地域的な考え方よりも、広い地域で通用する普遍的な考え方のほうが価値があるとされてきた。知恵や技よりも、知識や技術のほうが大事にされた。そして歴史の継承よりも歴史の発達を重要視してきた。ところが、このような近代

的価値観は、自然と人間が無事な関係を維持することを阻害するものであった。

近代社会は、時間のなかに進歩や発達という観念をすべり込ませることによって展開してきた。時間は進歩とともにあると考える精神の習慣が、近代社会の人々を支配してきた。ところが、そのとき、私たちは二つのことを忘れたのである。

その一つは、5 一つの進歩は別の面での後退をもたらすという簡単な事実であった。たとえば戦後の経済成長は、経済や消費の面からみれば大きな進歩をもたらしたが、環境の面からみれば後退の歴史であったことは確かである^①。このことはすべてのことに言えるのであって、それを進歩とみるか後退とみるかは視点の違いによるもの、つまり価値判断の違いによるものにすぎないのである。

しかし、とある人々は言うかもしれない。少なくとも科学の発達は認めてもよいのではないかと。だがそんなことはない。たとえば月の探査機が打ち上げられたとき、それは科学にとっては大きな進歩であった。科学の視点に立つかぎり、私もそれを否定しようとは思わない。だがこの出来事によって、『竹取物語』を生み出したような、月をめぐる人間の想像力によってつくりだされる文化が、大きく後退しはじめたことも確かだった。

人間にとって、そのどちらがより有意義なものなのかは、本当はよく分からない。航空宇宙技術の発達や、月の表面の映像がテレビに映しだされたこと^②によって人間が得たものと、月をみて想像し、ときに手を合わせて月を祈りの対象としてきた人間の文化。そのどちらのほうが、人間の暮らしにとって貴重なのかは、客観的には明らかにできないのである。はっきりしているのは、一つの科学の進歩が、一つの文化の後退を生んだ^③だけであり、にもかかわらず当時の私たちは、それを人類の進歩として受け入れる精神の習慣をもって来た、ということだけ^④である。

進歩と後退の間に存在する価値判断の役割、それが近代社会に暮らす人々の忘れた第一の点であるとすれば、第二の点は、時間に進歩という観念をすべり込ま^⑤せたとき、自然と人間の間に発生するトラブルに、これまで私たちが気づかずにきたことにある。それは次のようなことである。

近代以降の人々は、時間は進歩とともに展開していくと考え、実際その方向で歴史をつくりだそうとしてきた。ところが、それ

は自然にとっては受け入れがたいものであった。なぜなら自然が必要としている時間は、進歩とともにある時間ではなく、永遠の循環をつづけるような時間、あるいはつねに過去を継承しつづけるような時間だからである。簡単に述べれば、毎年同じような春がきて、夏がくる。そんな永遠に変わることのない時間の保証されていることが、自然にとっては一番幸せなのである。

にもかかわらず人間が時間に進歩を伴わせるようになると、自然が必要とする、変化を求めない時間の世界はこわされ、そのことが自然の永遠の営みを傷つけるようになる。こうして、⁶ 自然と人間の間には、時間をめぐる不調和が生じるようになった。

今日の自然荒廃の奥底には、このような問題があるといってもよい。とすると、自然の時間を保証できる人間の営みを再創造しないかぎり、自然と人間の間が発生するトラブルは解消できないはずなのである。

(内山 節^{たかし}『新環境学がわかる』より)

問一 〰️線部 a ~ e の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直しなさい。

問二 〰️線部 ① ~ ⑤ の助動詞の文法的意味を、次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 使役 イ 推量 ウ 過去 エ 可能 オ 受身 カ 断定 キ 意志

問三 I III にあてはまる言葉として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ところが イ すると ウ たとえば エ つまり オ そして

問四 —— 線部1 「その地域がつくりだしてきた伝統的な方法……近代技術によって自然を改造しているのか」とあるが、次の

ア～エの例が「伝統的な方法」ならA、「近代技術によって自然を改造している」のならBと答えなさい。

- ア 山間地で畑地を確保するために森林を焼き、その灰を肥料として使う。
イ 土砂災害や洪水災害を防止するために、一つの村を水没させてダムを造る。
ウ 農耕地として用いることができる平地が少ないため、丘陵斜面を利用して棚田を開発する。
エ 化石燃料を継続的に確保するために、海上に油田開発施設を作る。

問五 —— 線部2 「このような事実」とは、どのような事実か。本文中の言葉を使って、六十字以内で説明しなさい。

問六 —— 線部3 「いくつかのことを考えなくてはならなくなる」とあるが、それにあてはまらないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今後、自然は均一化されていくので、広い地域で通用する普遍的な技が必要になってくるということ。
- イ 人間が自然との良好な関係を築くためには、その地域が生み出した驚嘆すべき技や伝統が大切であるということ。
- ウ 自然を利用しながら守る方法には、地域の人々の技や知恵だけではなく知識やシステムも欠かせないということ。
- エ 世の中には共通の自然というものは存在しないから、自然保護の主体は地域でなければならぬということ。
- オ 自然と人間が無事な関係でありつづけるためには歴史や伝統を継承していかなければならないということ。

問七 —— 線部4 「人々は戸惑いを覚えた」とあるが、なぜ「人々は戸惑いを覚えた」のか。解答欄の「くのに、…から。」の形に合うように答えなさい。

問八 —— 線部5 「一つの進歩は別の面での後退をもたらす」とあるが、筆者は科学の発達が何の後退をもたらしたと考えているか。本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問九 ———線部6 「自然と人間の間には、時間をめぐる不調和が生じるようになった」とあるが、この不調和はなぜ生じるようになったのか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間は常に過去を継承しつづけることが大切だと考えているが、自然が必要としているのは常に進歩しつづけるような時間だから。

イ 人間は歴史や伝統ではなく未来を重要視しているが、自然が必要としているのは未来を否定し、過去に後退していくような時間だから。

ウ 人間は過去を現在から断絶すべきものと考えているが、自然が必要としているのは常に過去を継承しつづけるような時間だから。

エ 人間は進歩や発達というものは時間とともにあると考えているが、自然が必要としているのは、永遠に循環しつづけるような時間だから。

オ 人間はめぐりめぐりしく移り変わる時間こそ価値があると考えているが、自然が必要としているのは変化のないゆつくりと流れる時間だから。

【二】 次の文章は、まはら三桃の『たまごを持つように』の一節である。主人公の「早弥」は部員が四人しかいない中学校の弓道部に所属している。以下は、団体戦の出場メンバーの発表を目前に控え、全員で練習に励んでいる場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

一度目の射法を終えたところで、先生から声がかかった。

「松原さんと伊吹さんは、今日はやめましょう」

わたしも？

調子の悪い実良が休むのはわかるが、自分はまだ少しつめて練習がしなかった。もう一度さっきのような矢が射たい。あんな手こたえは初めてだった。練習をして、あの※離れの感覚を封じこめておきたかった。

試合も近いのに。

「伊吹さんのさきほどの矢はよい離れでしたね」

1 抗議をしたそうな自分の表情を察したのか、坂口先生はそう言った。

「はい」

思いっきりゆるむ顔を、早弥はおさえられなかった。

「だからもう少し練習させてください。しっかり自分のものにしたいです」

声もはずんだ。

「いえ」

けれど、先生は首を振った。

「せっかくよい矢が打てたのに、あせるとその感覚を乱すこともありますから」

毅然とした口調で言った。

「矢取りに行ってください」

「……、はい」

早弥はしぶしぶ承知して、控えを出た。

矢取りというのは、球技という球拾いで、まとば的場の矢を回収することだ。

早弥は、かんてきしよ看的所に向かう。看的所は、ま的場のわきにある的に中あたった矢の確認をする部屋だ。射手が矢を射るたびに、中り外れを確かめて、○か×かのスイッチを押す。それが表の電光掲示板に表示されるしくみだ。

矢取りをするときには、ここでブザーを鳴らし、赤い旗を出す。的場に人が出てくることを知らせるためだ。

※あずちには、六つの的が埋めこまれている。早弥は的に中らなかつた矢を拾い、中つた矢を引き抜いた。右から三番目の的の中央に一本矢が刺さっている。さつき、自分が射た矢だ。こんな真ん中に刺さつたことではない。a抜くのが忍びないくらいだった。

矢取りを終えて控えに戻ると、実良がゴム弓を引いていた。こちらを見ると、

「早弥ちゃんもゴム弓だつて」

と、そばのゴム弓を投げてよこした。プラスチックの握り手に分厚いゴムがついた練習用の弓をゴム弓といい、腕の力を鍛えるために、※サスペンダーの要領で引いたり、フォーム練習にも使つたりする。

十分に引くには、手に七キロの負荷がかかり、早弥にはなかなかbやつかいな代物だ。

両手に力をこめて、ゴム弓を伸ばし始めると、

「ねえねえ、スランプかな、あたし」

実良がにじり寄ってきた。びよんびよんといともたやすくゴム弓を引いている。

「まさか」

弓道においては完全無欠の実良が、スランプになんかおちいるわけがない。力、試合度胸、そして勘のよさ。実良は、自分が一つ一つ積み上げていかなければ持てないような能力を最初から持っている。そんな実良が小さな小石につまずいたとしても、少し

よるけるくらいだろう。完全に転んだりはないはずだ。

「たまたま外れが続いただけよ」

2 「そうかな」

いつになく神妙に実良はうつむいた。ちよつと心配になるが、その手に握られたゴムは、やわらかくなった水あめみたいだ。自分の持っているものと同じ材質だとはどうてい思えないほどで、

「大丈夫、絶対」

早弥は力をこめて言った。

早弥は子どものころから、不器用で何をやっても人並みにできなかった。折り紙も、ねんども、リボン結びも、幼稚園時代の早弥にはぜんぜんできなかった。小学校に入ると、体操服の着替えはいつもびり。体育のあった日のランドセルには、靴下が入っていた。どんなに大急ぎでやっても、靴下までまわらないのだ。

中学生になったとき、弓道をやろうと思ったのは、部活説明会で素敵だなど思ったのは本当だけど、これなら自分にもできるかもしれないと思ったからだ。引つ張っては離すだけで、矢は勝手に飛んでいってくれる。

けれど、それは ³ 大きな間違いだった。初めての ^{ましまえ} 前練習をした日、たった二本の矢を射ただけで、早弥はへとへとになってしまった。

「不必要なところに、力がたくさん入っているようですね」

坂口先生から言われた。そしてそれを気にしたとたん、呼吸は乱れ、動きはちぐはぐになった。

そんな早弥を尻目に、実良はどンドン上達していった。ぽとん、ぽとんと情けない音を立てて、矢道に矢を落とす早弥の隣で、実良は心地よいの音を軽やかに鳴らし続けてきた。

4 実良は天才なのだ。自分はちがう。

坂口先生が、夏の試合について重大な発表をしたのは、期末テストが終わった日だった。試合まで一週間。ここからは、毎日試合形式で、集中的に練習をしていくというタイミングだった。

「今年は、個人戦、団体戦ともに、柏木由佳さん、石田春くん、伊吹早弥さんの三人で登録をしました」
心臓が、大きく一つ音を立てた。

一瞬、静まり返った。

なんで、わたしが。

鼓動が速くなる。

とっさに実良を見た。ぼかんとしている。

早弥の予測に反して、実良の調子はなかなか戻らない。それもおかしな具合だった。近距離から巻きわらに打ち込む練習のときには問題なく射ることができ矢が、的の前に来ると突然コントロールがきかなくなるのだ。フォームにも呼吸にも問題がないに、離れのタイミングだけがずれてしまわらしかった。

「五秒です。五秒待ちなさい」

その日も、坂口先生は実良につきっきりで指導していたが、実良の状況は変わらなかったようだ。弓と体が引き合っている※か会の状態で、五秒は待つのがふつうだが、なぜか一秒も待てない。

「試合までに、実良の、松原さんの調子はよくなると思いますけど」

正直な言葉が早弥の口について出た。実良のことだから、すぐによくなるはずだと思う。第一自分には荷が重すぎる。

「確かに松原さんの調子はよくなります」

「じゃあ」

その先をあせる早弥に、先生はさとすようにゆっくりと言った。

「けれど、今日明日のうちに直るというものではないように、わたしには思えます。あせりは禁物です。その場しのぎで無理やり

調整しても、かえって悪くなってしまいうこともあるのです」

「いつまで待てばいいんですか？」

せきを切ったように、実良はきいた。

「公式の大会じゃなくて、練習試合には出られるんですか？」

「それはわたしにもわかりません」

「そんなあ」

「ただ、言えることは、今の状態はきつと直るといふことです。今はひたすら精進しなさい。矢数を重ねなさい。そして直ったときには、あなた自身が今よりもずっと大きな人間になっているといふことです」

「そんなのぜんぜんわかりません」

実良は大きく首を振り、そのままがつくりと頭を落とした。先生は静かに声をかけた。

「それがわかれば、精進する必要もないでしょうね」

5 なんだか禅問答みたいだ。

6 たまりかねたように実良は立ち上がった。

「もう、いい！」

ガラスが割れるように叫んで、体操服のまま道場から飛び出していった。

ガクあじさいが枯れていた。水切りをしなかったせいで。棚の下には、実良が残っていた荷物が一かたまりになっている。

逃げ出したかったのは、わたしのほうだ。

団体戦のレギュラーになるなんて、まったく予想外だった。そりゃ、選ばれる人たちをうらやましく思う気持ちはあるけれど、自分にはそんな力はないことは、わかっている。

「はあ」

大きなため息をつく早弥に、

「これ、届けてやろう」

と、春が実良の荷物に指をさした。道具入れの中には、制服も入っているはずだから、これがなければ、明日は困るだろう。けれど、早弥はすぐには返事ができなかった。実良にしてみても、自分よりもへたくそな人がレギュラーに選ばれて、きつとおもしろくないだろう。どんな顔をすればいいのだ。

「わたしが行こうか？」

7

案じたように言ってくれた由佳に、早弥は首を振った。先輩にそんなことをさせてはいけない。

「大丈夫です。春、行こう」

早弥は実良のバッグをつかんだ。たわなにぶら下がったマスコットが揺れるそれを、肩にかけた。ずっしりと重い。それはそのまま、早弥の肩にかかった試合へのプレッシャーのようだった。

注 ※ 離れ…：矢を放つこと。

※ あずち…：弓場で、的をかけるために土を山型に固めた所。

※ サスペンダー…：ここでは、筋肉を鍛えるゴム製の運動用具のこと。

※ 会…：弓を引ききり、矢が的をねらっている状態。

問一 〓 線部 a 「抜くのが忍びない」、b 「やっかいな代物だ」のここでの意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- a 「抜くのが忍びない」
- ア 抜くのも物足りない
 - イ 全く抜けない
 - ウ 抜くのがもったいない
 - エ 抜いてもしようがない
- b 「やっかいな代物だ」
- ア 複雑すぎる練習だ
 - イ 入り組んだ構造だ
 - ウ 面倒な問題だ
 - エ 手に余る道具だ

問二 〓 線部 1 「抗議をしたそうな自分の表情」とあるが、早弥は何に対してどのような「抗議」をしようと思ったのか。説明しなさい。

問三 〓 線部 2 『『そうかな』いつになく神妙に実良はうつむいた』とあるが、このときの「実良」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 何度練習を続けても思うように矢を飛ばすことができず、いらだちを隠しきれずにいる。
- イ 自分の不調を否定しようとする早弥の言葉を素直に受け止められず、不安に思っている。
- ウ ずっと抜群の腕前を誇っていたのに、今では矢を外してばかりいる自分を、恥ずかしく思っている。
- エ 調子よく矢を的中させている早弥に不用意に励まされ、怒りを感じている。
- オ このままではレギュラーの座を早弥に奪われるのではないかとほらはらしている。

問四 ――線部3 「大きな間違い」とあるが、何が「大きな間違い」なのか。本文中の言葉を使って、五十字程度で説明しなさい。

問五 ――線部4 「実良は天才なのだ。自分はちがう」とあるが、このときの早弥の感情を表す言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 違和感 イ 安心感 ウ 不安感 エ 優越感 オ 劣等感

問六 ――線部5 「なんだか禅問答みたいだ」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 実良の質問に対する坂口先生の返事が、真意の見えにくい不明確なものであるということ。
イ 実良の質問に対する坂口先生の返事が、冷淡で素っ気ないものであるということ。
ウ 実良の質問に対する坂口先生の返事が、実良を説き伏せるような高尚なものであるということ。
エ 実良と坂口先生のやり取りが、互いの言い分を譲らずけんか腰であるということ。
オ 実良と坂口先生のやり取りが、互いを深く思いやった心温まるものであるということ。

問七 ――線部6 「たまりかねたように実良は立ち上がった。……体操服のまま道場から飛び出していった」とあるが、このと

きの実良の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 実力なら誰にも負けない自信があつたのに、ゴム弓で練習させられただけでなく、レギュラーにもなれなかつたので、もう弓道をやめて別のスポーツをしようと思っている。

イ 技術が劣っているのに、自分を差し置いて選手に選ばれた早弥が、場を取り繕うかのように口を挟んでくるので、腹立たしくて我慢できなくなっている。

ウ 自分にも改善しなくてはならない点があることは十分承知しつつも、他の部員たちの見ている前で坂口先生からたしなめられたことで、恥ずかしくてたまらなくなっている。

エ これまでの調子を取り戻すために、もっと努力しようと前向きになっている自分を全く認めてもらえず、悲しみをこらえきれなくなっている。

オ スランプにおちいり、試合に出られなくなった自分に対してあせりや悔しさを感じる上に、打開策を見いだせず、いらだちを抑えきれなくなっている。

問八 ――線部7 「案じたように言ってくれた由佳」とあるが、誰のどのような気持ちを「案じた」のか。説明しなさい。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、奈良に馬庭山寺といふ所あり。その山寺になむ一人の僧住みける。年ごろ、その所に住みて、ねむごろに勤め行へども、悟りなきがゆゑに、邪見の心深くして、人に物を与ふることなかりけり。

かくて年ごろを経るに、僧既に老いに臨みて、つひに命終はらむとする時に、弟子を呼びて、告げていはく、「われ死にて後、この坊の戸を開くことなかれ」と言ひて、すなはち死ぬ。

その後、弟子、師の遺言のごとくして、七日を経て見るに、大きな毒蛇ありて、その坊の戸にわだかまれり。弟子、これを見て、おぢ恐れて思はく、「この毒蛇、必ず我が師の邪見によりて、なりたまへるなりけり。師を教化せむ」と思ふに、坊の戸を開きて見れば、壺屋の内に、銭三十貫を隠し納めたりけり。弟子これを見て、その銭をもつて、たちまちに大きな寺に持ち行きて、誦經に行ひて、師の罪報を弔ふ。まことに、師の、銭を貪りてこれを惜しむによりて、毒蛇の身を受けて、その銭を守るなりけりと知りぬ。

『今昔物語集』より

注 ※ 勤め行へども…仏道修行をするけれども。

※ 邪見…愚かで迷いが多いこと。

※ 坊…僧の住まい。僧坊。

※ 壺屋 … 物置。

※ 三十貫 … 「貫」は昔の貨幣の単位。

※ 誦經に行ひて … お経をあげてもらおうお礼として、お金を納めて。

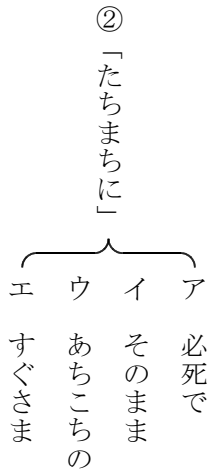
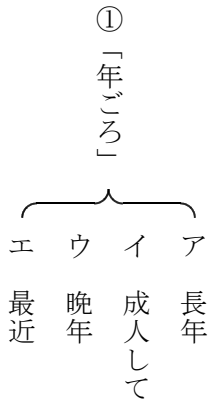
※ 罪報 … 悪いことをした報い。

問一 ——— 線部1 「その山寺になむ一人の僧住みける」の中で用いられている「なむ……ける」というような関係を何の法則と

言うか、答えなさい。

問二 ~~~~~ 線部ア 「ゆゑに」、イ「おち恐れて」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問三 ——— 線部① 「年ごろ」、② 「たちまちに」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。



問四 ──線部2 「邪見の心」とあるが、この僧の「邪見の心」とはどのような心か。その内容がよく分かる部分を解答欄に合う形で本文中から十字程度で抜き出さない。

問五 ──線部3 「与ふることなかりけり」を現代語訳しなさい。

問六 ──線部4 「師の遺言」とはどのようなものか。現代語で説明しなさい。

問七 ──線部a 「見れば」、b 「隠し納めたりけり」の動作主をそれぞれ本文中から抜き出して答えなさい。

問八 ──線部5 「師の罪報」とあるが、「師」はどのような報いを受けたのか。現代語で説明しなさい。

【一】 (45点)

問一	a 大規模	b かえり(みない)	c 伐採
	d 行為	e いた(める)	読み1点×2 書き2点×3

問二

①	イ
②	オ
③	ウ
④	カ
⑤	ア

1点×5

問三

I	ウ
II	エ
III	ア

2点×3

問四

ア	A
イ	B
ウ	A
エ	B

完答3点

問五

人	間	が	地	域	に	適	し	た	自	然	の	改	造	の	仕	方	や	利	用
の	方	法	を	身	に	つ	け	、	そ	の	技	と	知	恵	で	自	然	と	人
間	の	無	事	な	関	係	を	維	持	し	て	き	た	と	い	う	事	実	。

6点

問六

ア
ウ

2点×2

問七

近代社会では広い地域で通用する普遍的な考え方、知識や技術、歴史の発達が重要視されているから。の、

問八

人	間	の	想	像	力	に	よ	っ	て	つ	く	り	だ	さ	れ	る	文	化
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

3点

問九

エ

4点

【二】 (30点)

問一

a	ウ
b	エ

2点×2

問二

坂口先生が練習をやめなさいと言ったことに対して、もう少しつめて練習したいという抗議。

4点

問三

イ

3点

問四

引	張	つ	て	は	離	す	だ	け	で	矢	が	勝	手	に	に	飛	ん	い	っ
か	も	し	れ	な	い	と	い	う	考	え	。				に	も	で	き	る
て	く	れ	る	弓	道	な	ら	、	不	器	用	な	自	分		も	き		

5点

問五

オ

3点

問六

ア

4点

問七

オ

4点

問八

早弥の、実良と顔を合わせることに對する氣まずさ。

3点

【三】 (25点)

問一

係り結び	の法則	1点			
問二 <table border="1"> <tr> <td>ア</td> <td>ゆえに</td> <td>イ</td> <td>おじおそれて</td> </tr> </table>	ア	ゆえに	イ	おじおそれて	1点×2
ア	ゆえに	イ	おじおそれて		

問三

①	ア	2点×2													
②	エ	問四 <table border="1"> <tr> <td>銭</td> <td>を</td> <td>貪</td> <td>り</td> <td>て</td> <td>こ</td> <td>れ</td> <td>を</td> <td>惜</td> <td>し</td> <td>む</td> <td></td> </tr> </table>	銭	を	貪	り	て	こ	れ	を	惜	し	む		3点
銭	を	貪	り	て	こ	れ	を	惜	し	む					

問五

与えることがなかった

3点

問六

自分が死んだ後、僧坊の戸を開けてはならないというもの。

4点

問七

a	弟	子	2点×2
b	僧	(師)	

問八

毒蛇になってしまうという報い。

4点